

I P M実践指標モデル（茶）

分類	管理項目		管理ポイント	点数	チェック欄				
					昨年度の実施状況	今年度の実施目標	今年度の実施状況		
予防	し病に害く虫い・環境草の整備生	適正な品種の選択	炭疽病や輪斑病等の常発地帯では、改植・新植する場合にやぶきた以外の抵抗性の強い品種を導入する。	1					
			クワシロカイガラムシの常発地帯では、改植・新植する場合にやぶきた以外の抵抗性の強い品種を導入する。	1					
	ほ場周辺の環境改善		ツマグロアオカスミカメ等の害虫の増殖・飛来源となる雑草や樹木を除去する。	1					
			炭疽病やもち病の多発地帯では、ほ場が陰湿にならないよう可能な限り周辺の林木を伐採したり枝管理を行う。	1					
判断	防除要否及びタイミングの判断	病害虫発生予察情報の確認（必）	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入力し、確認する。	1					
		病害虫や天敵の観察	ほ場には必ずルーベや虫見板を持参し、病害虫や天敵の発生状況や生態を観察する。	1					
		雑草の観察	ほ場と周辺の雑草の状況（草種、発生量）を観察、把握する。	1					
		炭疽病	伝染源の密度や感染期の降雨状況さらには品種の抵抗性度合いを考慮し、適期防除に努めるとともに過剰防除は行わない。	1					
		もち病	伝染源の密度や感染期の降雨状況さらには品種の抵抗性度合いを考慮し、適期防除に努めるとともに過剰防除は行わない。	1					
		輪斑病	摘採あるいは整枝の1日後までに防除する。やぶきたなど本病に弱い品種以外は防除をしない。	1					
		ハマキムシ類	地域内あるいは近隣地域に設置された誘蛾灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を確認し、適期防除に努める。	1					
		チャノホソガ	地域内あるいは近隣地域に設置された誘蛾灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を確認、または、新芽への産卵状況を把握し、適期防除に努める。	1					
		チャノミドリヒメヨコバイ・チャノキロアザミウマ	新芽生育期の発生状況を把握し、適期防除に努める。	1					
		クワシロカイガラムシ	有効積算温度法や粘着トラップ法等により幼虫のふ化最盛期を確認し、適期防除に努める。	1					
ハダニ類	常に発生状況と気温の推移に留意し、急増する前に防除を行う。	1							
防除	生物的防除	ハマキムシ類	性フェロモン剤の使用	性フェロモン剤を圃地単位で積極的に導入する。注1	2				
			生物農薬の使用	病原性ウイルス剤（GV）やBT剤を使用する。	1				
		クワシロカイガラムシ	土着天敵の保護（必）	寄生蜂等の天敵に影響が少ない農薬の使用を心がけるとともに、天敵の活動時期に影響の高い農薬の使用を控え、その活動を保護する。	1				
		カンザワハダニ	土着天敵の保護（必）	ケナガカブリダニ等の天敵に影響が少ない農薬の使用を心がけるとともに、天敵の活動時期に影響の高い農薬の使用を控え、その活動を保護する。	1				
		チャトゲコナジラミ	土着天敵の保護（必）	シルベストリコバチ、クロツヤテントウ等の天敵に影響が少ない農薬の使用を心がけるとともに、天敵の活動時期に影響の高い農薬の使用を控え、その活動を保護する。	1				
	物理的防除	赤焼病（幼木）	防風ネット	強風による発生を軽減するために、防風ネットを設置する。	1				
		クワシロカイガラムシ	せん枝	多発茶園では一番茶摘採後に中切り更新し寄生部を除去するとともに樹勢回復を図る。	1				
		雑草	マルチ・敷草・機械除草	マルチ（定植時）やうね間の機械除草、敷草等の除草剤を使用しない雑草管理対策を実施する。	1				
	化学的防除	農薬の使用全般（必）	薬剤の選択		個々の農薬の効果特性を理解し、適切な農薬を選択する。	1			
					農薬を使用する場合には、同一成分や同一系統の農薬を繰り返し使用せず、農業工業会が提供している作用機作による農薬の分類（IRAC、FRAC）を確認する。さらに、当該地域で薬剤抵抗性が確認されている農薬は当該地域では使用しない。	1			
散布量の決定			十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する（薬剤散布後の残液が出ないように薬液を調整する）。	1					
散布方法			農薬散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。防除は早朝か夕方の無～弱風時を選んで行う。	1					
	散布後の処理	散布器具、タンク等の洗浄を十分に行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。	1						
その他	作業日誌（必）		各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	1					
	研修会等への参加		県や農業協同組合が開催するI P M研修会や防除研修会等に参加する。また、研修会等の内容は、家族や作業者等へ周知し、情報共有する。	1					
				合計点数					
				評価結果					

\*（必）と記述している管理項目については、必ず管理項目として設定しチェックする。

注1 性フェロモン剤を個人ほ場で導入した場合は1点とする。